

外国語文学作品講読の課題

英語教育講座 竹永雄二

1. 授業の目的と内容

1) 授業の目的

授業の主な目的は、「イギリス文学の古典の一つである Jane Austen の *Pride and Prejudice* の英語を正確に読み取る訓練を通して、高度の英語読解力を身につけ、作家・作品理解を深める」ことである。

到達目標は次の 3 つである。

(1) *Pride and Prejudice* が正確に読める。(2) *Pride and Prejudice* に対する説得力のある評価ができる。(3) *Pride and Prejudice* について正確で、説得力のある英文でレポートが書ける。

2) 授業の内容

(1) 教材について

夏目漱石の高い評価でもよく知られている Jane Austen の代表作と言ってよい *Pride and Prejudice* は丹念で、緻密な英語で書かれており、大学院レベルの高度な英語力を養成するのに相応しい教材である。内容的にも、主な二人の主人公同士が、高慢と偏見から相手を間違って理解していたことに気づき、間違いを認め、相手への理解の深まりが愛の深まりへとつながり、結果として理想的な結婚へ至るといふもので、間違いを通して成長していくという、教育的な主題を持っている。さらに主人公を取り囲む周縁的な人物も、それぞれ弱点、欠点を持っているが、それらの人物が決して排除されず、小さいながらも一つの共同体の構成員でありつづけるという彼女の作品世界は、現代世界の共生、学校における共生といった今日的な考え方にもつながりを持つ作品である。

2 授業の工夫

1) 授業の進め方

受講者は 2 人で、一人は高等学校、もう一人は中学校の現職の教員であった。すぐに信頼し合える環境づくりができたと感じられたので、この信頼関係を大事にし、作品を深く読み込み、疑問点を討論しながら、作品理解を深めていく進め方をした。学部の授業であれば、文学の授業ではあっても、単なる英語表現の鑑賞に終わらず、英語を使うという活動を入れていかねばならないが、今回の大学院の授業ではそのようなことは行わず、極めて伝統的な訳読のスタイルで進め、特別な授業の工夫を行っていない。それでも楽しく、充実した授業になったのは、受講者の誠実さ、忍耐強さ、人間的な成熟によるところが大きく、これは感謝しなければならない点である。

2) 指導上の工夫

テキストとの有意義な交流ができるような支援を大切にした。外国語の文学作品を読むということは、外国語を日本語に置き換えるという翻訳作業だけではなく、読み手自身が意味を主体的に造り出していく創造的営みであると考えられる。テキストを読むということは、テキストの中に組み込まれた客観的意味を理解するという受動的作業ではないという立場に立って、一見単調で、機械的に見える訳読の活動に能動的な意味づけをするように配慮した。

とは言っても現実的には様々な誤読が出て来る訳ではあるが、正確な語学的知識、作品の背景の知識の欠如などを指摘して、そのような解釈を一方的に排除するのではなく、その過程に注目し、次のより発展した意味の構築につなげていくよう配慮した。エラーということを創造的視点からとらえ、次の成長につなげていくことは、かなり

飛躍してしまうが、教師としての日常的な取り組みにもつながるであろうと思われるからである。

3. 学生の評価と今後の改善に向けて

授業の最終回に、受講生 2 人に対して無記名による授業評価アンケートを行った。アンケート内容と結果は以下の通りである。

1) 授業の難易度

やや難しかった (1)、ちょうどよい (1)

2) 授業の進度

ちょうどよい (2)

3) 教員の話し方

わかりやすかった (2)

4) 教材の使い方

効果的であった (1)、効果的でなかった (1)

5) 双方向性

強くそう思う (2)

6) シラバスへの準拠

強くそう思う (1)、まあそう思う (1)

7) 改善への意欲

強くそう思う (1)、まあそう思う (1)

8) 授業の満足度

全体的に満足の行くものだった (2)

-----自由記述-----

9) 授業の良い点

・学部時代に Volume 1 の一部しか読んだことがなかったので、全体に触れられて興味深かった。
・学部時代と比べて多少英語力は上がっていたと思うのですが、当時の英語と今の英語との違いにも注目できた。
・CD を聞いてイギリス英語の発音に慣れることができた。
・教材は自分にとって少し難しいものだったが、わかりやすい解説のためよくわかった。

10) 授業の改善点

・舞台となったイギリスの風景とか家の様子が見てみたかったです。

全体として好評であったというような判断をしてよいのかわからない。少人数で、大学院ということもあり、かなり遠慮があるように思う。アンケートには現れていないが、ふり返ってみると改善すべきことが多々ある。

1) 授業の単調さ

体系化された学術理論を学んでいく領域と異なり、テキストを読むという毎回同じことの繰り返しになっている。一回毎の達成感、全体としての発展性をどのように造り出していくか改善する必要がある。例えば background, narration, dialogue, characters など、一回毎の授業テーマを設定し、一つ一つ階段を上るような展開とし、最終的に総合的な視点から作品理解が深まり、英語力が向上し、ゴールにたどり着いたという達成感を持てるような工夫が必要である。

2) reading だけに偏っていること

reading だけの力を高める授業となり、その他のスキル改善となっていないことが問題である。一章ごとにやさしい英語で retelling の活動を入れたり、学期末にレポートを提出させるだけでなく、こちらからテーマを指定したりして、レポートの回数を増やし、正確で説得力のある英文を作成する活動を取り入れていく必要がある。また作品を基にした映画を活用し、hearing 力を高めていく工夫も必要である。

3) 文学作品を読むことの意義の説明不足

大学で英語を学ぶことは、欧米の優れた文学作品を読むことであるということが当然視された時代は遙か過去のものになった。このような困難な環境下にあっても、古典的な学びの良さを伝えていく強い気持ちが必要である。コミュニケーションというものが、機能的なものだけにとどまらず、空間や、時代を超えた深い情感を伝える手段であること、多様な世界、文化、人とのつながり、ネットワークを造り出していくことが、人間の視野を広げ、心を豊かにしていくことを、確信を持って説明していくことが今後の改善点として、今強く思うことである。

